

じょっぴんワード

教化の現場

今年厳修される750回御遠忌に向けて、各地区・各組において様々な「お待ち受け大会」が開催された。今回は第13組(士別・名寄地方)において昨年10月24日に行われた「宗祖親鸞聖人750回御遠忌並びに同朋会運動50周年お待ち受け 同朋大会」を紹介する。

その名が示すように「お待ち受け」の意義を「同朋大会」として受け止め直し、僧侶主体で企画される従来の在り方から脱却しようという試みは、僧侶とご門徒による「共同声明文の宣誓」を大会の柱にすることに集約されていった。

スタッフが組内の全寺院を回り、所属する推進員を中心に呼びかけ、大会の開催趣旨説明と聞法生活の具体的な課題を語り合う「分科会」を開催するところから取り組みは始まる。そのことは同時に推進員の活動・交流の場を生み出すことにもなった。「分科会」の語り合いを通して出た課題を5回に亘る会議において集約し、僧俗共に浄土真宗の門徒として生きる姿勢を表明したのが「共同声明文」である。

「共同声明文」では、寺が寺族の経済生活の手段に成り果て、ご門徒は宗教不信の中で苦悩や不安を問いたずねる場を失っていることの危機感と共に「寺は生きているのか、もう死んだのか」と問いを突きつけている。

その問いに真向かいになるべく立てられた誓いは、ご門徒からは聞法とお内仏を中心とした生活を営むこと、僧侶からは教えを学び語ることを努力を惜しまないことなど、お互いに3箇条ずつ表明しあう形式となっている。

育成員と推進員の関係を組単位で見直し、推進員の活動の場を育成員が作り出すことが今後の教化事業の「鍵」となる。第13組においては願いをもって生み出された「共同声明文」が、これから組の教化事業の重要な確認点となることだろう。



宣誓された「共同声明文」は、組内全寺院にパネル掲示された他、ご門徒にもプリント配布されている。

う現実がある。そこに根深くあるものこそ、霊の障りをおそれ、霊を祀り、霊からの呪縛を引きずって生きるという「霊の宗教」である。すなわち、その国家神道の背景には、日本の歴史の中で培われてきた、御霊信仰である民族宗教があり、それは、原始社会に自然発生的に生まれ、人々の生活意識そのものであり、実際にはどのようなものであつたかは明らかではない部分が多いが、仏教など外来宗教などの影響を受ける以前の原始宗教である、いわば、原始社会の習俗となつた宗教である。

このような習俗宗教、霊の宗教は、原始社会という共同体の生活に密着し発生した宗教であり、したがって主體的な個人の宗教ではなく、どこまでも地域の宗教であり、村の宗教であり、家の宗教である、すなわち「共同体の宗教」という閉鎖的な性格を持つものである。それは、常に他を排除し続ける性質を持つ「差別的宗教」であり、明確な教義を持たない「呪術的な慰霊、鎮魂の儀式宗教」であり、儀式を司る主宰者が絶対的な権力をもつ「権威の宗教」である。

本来、このような閉鎖的、習俗宗教は日本国以外の国々のように、社会の拡大とともに衰微し、「覚」の宗教である普遍宗教によつて解消されていかなければならないが、いまなお靖国神社信仰として現存し強力に影響し続けているところ、私たちの意識構造と、わが国の習俗社会構造の特異性があるのではないだろうか。靖国神社問題は決して政治的課題ではなく、浄土真宗の門徒と名乗りながら「内なる靖国」を抱えつつづけていることを自覚することなく、現に先祖と家と固く結びついていく寺檀関係の中で、先祖供養を仏事と称して執り行っている自身が問われているのである。



御念仏の声響く御影堂に身を置き、学習会はじめ様々な活動への意欲を新たにいたしました。 7名

▼一日参拝 11/25 北第3組坊守会ほのほ 7名

御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」
教区御遠忌テーマ「あなたは、与えられたいのちとどう向き合う？」

教化本部通信 【第63回】

真宗門徒の生活を回復しよう 朝夕におつとめをしましょう・声にだしてお念仏を申しましょう
すすんでお寺の法座に身を運びましょう・報恩講を大切にお迎えしましょう

しんらんweb 検索 ほほ毎日更新中

真宗同朋会運動50年に向けて

その検証 歩み(十四)

靖国神社問題から問われること (I)

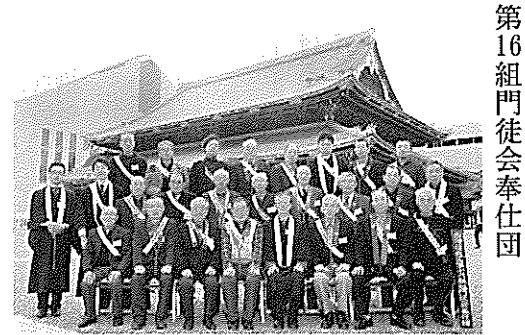
教化本部 古卿 誠幸

北海真宗・1985(昭和60)年12月号より全15回に亘り連載された「靖国」―真宗門徒として靖国問題の内実を問う―(昭和60年度実施された、当時の北海道教学研究所所長山本良超師の、靖国問題研究会での講義録)の中で、先ず「この問題は、私どもが親鸞聖人の教えに帰して、真宗門徒として真面目に生きようとするならば、念仏の信と両立しがたいというような、一番根源的な問題に触れてくる」ことであり、また「靖国問題とは、国家神道の問題である」としている。

は怨霊観念から敵味方を問うことなく手厚く鎮めなければならぬという伝統的なものとは異なり、どこまでも自派の犠牲者の名誉を回復し、天皇への忠誠心を高め戦いの士気を鼓舞するためのものがあり、自派以外のものには一瞥することなく、どこまでも敵として排除するという、人為的に作り上げられた、軍色の濃い政治的疑似宗教であると指摘している。

国家神道とは、1853(嘉永6)年ヘリー来航を始まりとして、幕末から明治維新にかけて十数年間に亘り続いた倒幕王政復古にいたる軍事抗争で犠牲となった倒幕派自派の犠牲者のために、招魂場を設け神道式の招魂祭が行われたことにその原型がある。そして、この招魂の思想は、日本古来の御霊信仰である、戦場での死者の霊

こうした中で、新首都に中央の東京招魂社が創建され、1869(明治2)年5月函館戦争が終わり、内戦終結に伴い6月に大招魂祭が行われ、1879(明治12)年現在の靖国神社と改称し社格が定められた(地方の招魂社は護国神社と改称)。



きれいに御修復された御影堂での勤行と御伝鈔拝読に感動し、同朋会館では充実した研修になりました。 24名



報恩講参拝、奉仕。共に法友として語り合い、温かく厳しい宗祖のお声に触れ、我身を問われました。 7名

▼奉仕団 11/21~23 H20 after 東北連区奉仕団 7名

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌 お待ち受け総上山